

# 日本の大学英語教育におけるディスカッションの 指導法とは [ 2 ]

——ディスカッション指導につながるコミュニケーション活動を考える——

金子智香\* ・ 君塚淳一\*\*

(2008年6月30日受理)

Teaching How to Manage Discussions in English at Japanese College [ 2 ]

How to make lessons communicative

Tomoka KANEKO and Junichi KIMIZUKA

キーワード: ディスカッション、スピーキング力、Communicative Language Teaching、コミュニケーション活動

## Abstract

In the previous paper, “Teaching How to Manage Discussions in English at Japanese College [1] –How discussion techniques could be taught effectively–”, the three main problems in teaching discussion techniques to Japanese college students were discussed, and some guidelines and rules for each problem were suggested. Among the three problems: 1. students’ limited knowledge and experience of discussion techniques in English, 2. students’ insufficient English speaking ability, and 3. students’ uncomfortable feeling about holding a discussion, this paper focuses on the second problem, students’ insufficient English speaking ability. The purpose of this paper is to examine ways of making English lessons at Japanese college more communicative for the improvement of students’ English speaking ability, which leads to one of the keys to successful managing discussions. The paper will consider ways of incorporating factors of Communicative Language Teaching into English classrooms at Japanese college and recommend appropriate implementation of communicative activities. It also presents the importance of relating each communicative activity to discussion techniques so that students regard holding a discussion as their final goal of English learning

## 1. はじめに

前稿「日本の大学英語教育におけるディスカッションの指導法とは[1]—授業における効果的方法を考える—」では、日本の大学英語教育におけるディスカッションの効果的な指導法を、ディスカッションの際に考えられる、①ディスカッションの理論・ルールに関する知識のなさ、②スピーキング力不足、③ディスカッションへの抵抗感という3つの問題点、から考察し、それぞれに対応する明確なルールの必要性を論じ、日本人大学生がディスカッションをする際の対処法を提示した。

---

\*茨城大学非常勤講師

\*\*茨城大学教育学部英語教育教室

その際、特に②学生のスピーキング力不足に関しては、ディスカッションというものが、学生にとって既存・新出の言語形式や言語機能を使用し、論理的な討論活動を展開する総合的な言語運用という点から、英語コミュニケーションへの動機付けとして重要な手段であること、また限られた語彙や表現を使用するだけでもディスカッションが可能となる方法を模索することは、日本の英語教育に重要な課題であると論じた。そして、その方法として学生のスピーキング力などの実態に合わせ、タスクの難易度の調節の工夫が求められることや、ディスカッションの種類とその指導手順を示した。

本稿では、この②スピーキング力不足に関する考察を更に加えるために、学生のスピーキング力向上の指導方法として、ディスカッションを最終目標と見据えた様々な種類のコミュニケーション活動を導入し、コミュニケーション指導をすることにより、ディスカッションの授業への実践的導入の可能性が広がることを具体的に考察していきたい。そのために、まず、授業における言語活動としてのディスカッションの基本アプローチと考えられている Communicative Language Teaching についてまとめ、次に、シラバスデザインとコミュニケーション活動の観点から、ディスカッションを最終目標とした Communicative Language Teaching の導入の仕方について検討する。

## 2. Communicative Language Teaching とは

### 2.1 Communicative Language Teaching の定義と日本の大学での利用方法

ディスカッション指導の基本概念として、コミュニケーションアプローチである Communicative Language Teaching が考えられる。Brown(1987)は、Communicative Language Teaching の定義を単純化し、以下のようの特徴をまとめている(Brown 213)。

- ① Classroom goals are focused on all of the components of communicative competence and not restricted to grammatical or linguistic competence.
- ② Form is not the primary framework for organizing and sequencing lessons. Function is the framework through which forms are taught.
- ③ Accuracy is secondary to conveying a message. Fluency may take on more importance than accuracy. The ultimate criterion for communicative success is the actual transmission and receiving of intended meaning.
- ④ In the communicative classroom, students ultimately have to use the language, productively and receptively, in unrehearsed contexts.

これらの特徴から、Communicative Language Teaching は、①、②の特徴からシラバスの面では、言語形式ではなく、概念や機能を中心に授業計画を立てる概念・機能シラバスを基礎としていることが理解できる。また一方で、教授法の面では、③、④の特徴から実際のコミュニケーションに近い現実的な状況の中で、メッセージ伝達能力を育成することに重点が置かれていることが分かる。ディスカッションでは、自分の意見を明確に述べたり、相手を説得するために建設的且つ論理的に話しをしたり、他者と協力してある問題に関する解決策を提示したりする必要がある。よって、ディスカッションをするには、文法、語彙、音

韻などの言語形式に関する知識ばかりでなく、場面や相手に応じた適切な言語使用や言語表現、そして turn-taking などの談話ルールやジェスチャーなどの非言語コミュニケーションの要素などを総動員した、総括的な言語運用を可能とするコミュニケーション能力が必要とされる。多くの大学生が高等学校まで、言語形式に焦点を当てた構造シラバスを用いた、流暢性よりも正確性に重点を置いた言語形式重視のドリル練習や文法訳読法による英語指導により、これまでは言語運用能力を伸ばす機会がほとんど与えられなかったと考えると、それだけでもディスカッションがいかに授業で困難であるかは容易に推測できる。以下、日本の大学英語教育においてディスカッションを指導する際に、これらの Communicative Language Teaching の特徴が、どのように日本の大学英語教育に対応するかを考えることによって、Communicative Language Teaching の導入の意義を Brown(1987)の定義(Brown 213)をもとに確かめた上で論をすすめた

い。

まず、①の特徴は、言語目標の焦点を文法に限らず、コミュニケーションを構成するすべての要素に当てるということである。この特徴は言語形式の知識習得重視の英語学習経験をしてきた大学生が、バランスのとれたコミュニケーション能力を体得するためには、文法などの言語形式の知識だけでなく、コミュニケーションを構成するすべての要素を学ぶ必要があるという観点から、重要な特徴である。また高等学校までの英語学習が文法中心傾向にあるにせよ、すべての学生が文法を完璧にマスターしているわけではなく、大学でも文法指導をする必要がある。したがって文法指導を目標から排除するのではなく、他のコミュニケーション能力を構成する要素と共に指導するという点において、日本の大学英語教育に対応していると考えられる。

②の特徴は、Communicative Language Teaching はシラバスを言語形式ではなく言語機能中心に計画すべきであると考えられるものである。言語機能に焦点を当てることにより、その言語機能の習得を目的としてのコミュニケーション活動が選定・作成され、それゆえに学生たちは言語運用練習の機会が与えられることとなる。言語形式と言語機能のシラバス上における扱いに関して、Nunan(1989a)は strong version of Communicative Language Teaching と weak version of Communicative Language Teaching が存在し、それらに関して次のように述べている。「Strong version of Communicative Language Teaching では、言語能力は、実際の活動の中で、目標言語を使用することを通して習得される。言い換えると、授業時間は、ドリルや制限練習に費やされるべきでなく、教室外で学習者が必要とする言語項目を習得できる活動に費やされるべきである。また、weak version of Communicative Language Teaching は、言語構造や文法をコミュニケーションな教授法と組み合わせることにより、伝統的な言語構造の要素とコミュニケーションな要素を上手に統合している。」(Nunan 24-26) どちらのバージョンを選択するかは、既存のシラバスの使用を希望するかどうか、そして授業目標や学習者の習熟度に関係すると考えられる。既存のシラバスを利用する点においては、weak version of Communicative Language Teaching の方がより導入しやすい。なぜならば、構造シラバスなどの既存のシラバスに、折衷的に Communicative Language Teaching の要素を比較的手軽に取り入れることができるため、授業計画を言語機能中心にすべて変更する必要がある strong version of Communicative Language Teaching よりも、既存のシラバスに大きな変更を加える必要がないからである。その一方学習者の習熟度の点においては、strong version of Communicative Language Teaching の方が、文法を含む言語能力が実際の言語活動を通して習得される点から、言語形式の知識の基礎がある学習者には有効であり、文法指導への時間が言語使用の機会へ費やされるという点においても効果的であると考える。よって、シラバス選定・作成の際には、言語形式・文法をどのように捉え・扱うかを確認し、授業

目標、学生の習熟度などを考慮に入れることが大切である。

③の特徴は、メッセージ伝達において、正確性よりも流暢性が重んじられる点にある。言語形式に焦点を当てた構造シラバスにより、流暢性よりも正確性に重点が置かれた英語学習をしてきたと考えられる大学生にとって、流暢性を伸ばす練習は確かに必要である。既習の言語形式を生かしながら、ディスカッションを実践的に行い、その中で言語形式以外のコミュニケーション構成要素を習得させ、且つ、授業目標や学習者の習熟度に応じて、正確性を高めるために文法指導も臨機応変に実施し、実際の言語使用により、学習者に流暢性を向上させる機会を与えることは重要である。

④の特徴は、生徒が言語使用をする際に、現実的で自然な状況を設定することの重要性を説くものである。現実的且つ自然な状況設定が、学生のメッセージを伝達する必要性と発話の必然性への意識、コミュニケーション活動への動機を高め、言語運用の練習が効果的になりうる。様々な場面や状況を想定し、その中で活動を展開し、コミュニケーション能力を向上させるのも一手段であろう。しかし、とは言ってもEFLの環境下で英語を学ぶ日本人大学生にとっての、海外でのショッピングや道案内などESLの場面設定は、必ずしも彼らの生活に密接した切実で現実的な状況とはいえないことも事実である。その点で、ディスカッションは学習者の興味や習熟度などに合わせて、話し合う問題(トピック)を選びやすく、効果的な手段になると言えるだろう。

## 2.2 コミュニカティブ教授法

Communicative Language Teachingを実践する際、どのようにCommunicative Language Teachingの特徴を授業に取り入れるかを考えることは当然重要である。コミュニカティブ教授法とは、Communicative Language Teachingに伴って開発された教授法である。Johnson and Johnson(1999)は、コミュニカティブ教授法の標準モデルの5つの特徴として、「①適切さ、②メッセージに焦点が当てられていること、③学習者がメッセージを伝えたいという願望をもつような実際の心理言語的な言語処理を行わせること、④リスクを冒す技能に重点が置かれていること、⑤文法・音韻・意味・談話・対人関係などの要素を同時に処理する能力を養う自由練習の指導法を発展させたこと」を挙げている(Johnson and Johnson 69-72)。これら5つの特徴は、前述したBrown(1987)のCommunicative Language Teachingの定義(Brown 213)と対応しているもので、①適切さは上記の定義の2番、②メッセージに焦点が当てられていることは3番、③学習者がメッセージを伝えたいという願望をもつような実際の心理言語的な言語処理を行わせることは4番、④リスクを冒す技能に重点が置かれていることは3番、⑤文法・音韻・意味・談話・対人関係などの要素を同時に処理する能力を養う自由練習の指導法を発展させたことは1番に、特に該当すると考えられる。これらの特徴を反映するコミュニケーション活動として、シュミレーションやロールプレイ、インフォメーションギャップ活動などがある。この5つの特徴はすべてディスカッションをする際に密接に関わるものであり、その特徴を含むコミュニカティブ教授法(コミュニケーション活動)を用い、ディスカッションを最終目標と見据えて授業をすることにより、段階的に、よりスムーズに学生主導の討論型ディスカッションへ進むことができると考えられる。しかしながら初級者から上級者まで、幅広い習熟度レベルでの指導を可能にするためには指導方法に工夫が要求されることも事実である。次章において、シラバスデザインとコミュニケーション活動の選定・作成の観点から検討したい。

### 3. Communicative Language Teaching の導入の仕方

#### 3.1 シラバスデザインについて

Communicative Language Teaching の要素を授業に取り入れる際、シラバスの選定・作成が重要である。概念・機能シラバスに関して Finocchiaro and Brumfit(1983)は、「概念・機能シラバスにおいて、習慣形成・スキル習得の活動である、反復、置換、拡張、変形などのドリル練習は有効であるが、それらの活動自体が、授業の最終目的ではなく、授業の最終目的のための道具であり、これらの活動を上手に取り入れることは、学習者が言語形式・文法の正確性に敏感に反応するために大切である」と述べている (Finocchiaro and Brumfit 165-166)。また同時に彼らは、オーディオリンガル法と概念・機能教授法とを比較して、「オーディオリンガル法では言語の形式的能力の習得が最終目的であり、ドリル練習は主要な教授法であるのに対し、概念・機能教授法では、言語形式に関する知識を効果的且つ、適切に使用することができるコミュニケーション能力の習得が最終目的であり、ドリル練習は主要な教授法ではない」とも述べている (Finocchiaro and Brumfit 91-93)。Communicative Language Teaching の要素を授業に取り入れる際には、これらの概念・機能シラバスの特徴をまず把握しておくことが重要である。またシラバス選定・作成の際には、構造シラバスの特徴である言語形式・正確性、そして概念・機能シラバスの特徴である言語機能・流暢性をどのような割合で取り入れるのかが重要課題となる。一見、これら2種のシラバスの特徴は相反するように見えるが、どちらもコミュニケーション能力育成には不可欠な要素であることから、これらの特徴はコミュニケーションを成立させるために補完作用関係にあると捉え、授業目標や、学習者の習熟度を考慮し、言語形式と言語機能との割合を判断して、シラバスを選定・作成することが大切だと思われる。

Yalden(1983)は、構造シラバスとコミュニカティブシラバスを融合した6種類のコミュニカティブシラバスを提案している (Yalden 109-118)。以下は Yalden(1983)が提案する6つのシラバスの種類である (Yalden 109-118)。

##### Communicative Syllabus Type 1: Structural-Functional

言語形式とコミュニカティブな言語機能が独立して扱われ、コミュニカティブな言語機能を教える前に、言語形式が教えられるよう計画されている。

##### Communicative Syllabus Type 2: Structures and Functions

言語形式を中心に授業計画を立て、概念や機能をその言語形式に対応させて盛り込む。Communicative Syllabus Type1: Structural-Functional との違いは、Type1 は、言語形式の後にコミュニカティブな言語機能を教えるが、Type2 は、コミュニカティブな言語機能を後にせず、言語形式と共に最初から教えるところにある。

##### Communicative Syllabus Type 3: Variable Focus

学習者の習熟度(初級者から上級者)の向上に従って、何を中心に授業計画を立てるかという焦点が変化する。初級者から上級者になるにしたがって、構造シラバス、コミュニカティブシラバス、そして、最終的に機能シラバス、場面・教科中心シラバスへと移行する。

#### Communicative Syllabus Type 4: Functional

言語機能中心に授業計画が立てられる。学習目標はすべて言語機能の観点から設定され、その学習目標に基づいて、教えられるべき機能が決定され、その機能に基づいて、教えられるべき文法項目やその順番が決定される。

#### Communicative Syllabus Type 5: Fully Notional

概念中心に授業がたてられる。言語学習の目標が特定の狭い範囲に定まっている学習者向けである。

#### Communicative Syllabus Type 6: Fully Communicative

学習者の習得必要項目中心に授業が立てられ、授業において最も教師からのインプットを必要としない。

日本の大学英語教育において、2.1 で先述したが、既存のシラバス使用の観点から、strong version of Communicative Language Teaching よりも、weak version of Communicative Language Teaching が、折衷的に Communicative Language Teaching の要素を取り入れることが出来るため比較的手軽に実施可能であることを述べた。この weak version of Communicative Language Teaching は、上記の Communicative Syllabus Type 1: Structural -Functional に匹敵するものである。よって既存のシラバスの利用により、すぐに実践可能なシラバスは Communicative Syllabus Type 1: Structural -Functional であると考えられる。

前稿において、ディスカッション指導の例として、ディスカッションを各ユニットの最終達成目標として、ディスカッションに至るまでの授業を、ディスカッションを中心に据えて計画、指導するという、三浦 (1992) が考案した programmed discussion を紹介したが、三浦の programmed discussion とは、「ある話題の議論に必要な装備 (論争点・具体的事例・参考意見・vocabulary・structure・strategy・自分の意見形成) 一切を提供した上で行うディスカッション」であり、ディスカッションというタスクを達成するために、一つのユニット (課) の中に「言語材料・skill・activity・文化的素材」が綿密、且つ意図的に盛り込まれているものである (三浦 31)。つまり三浦 (1992) の programmed discussion (三浦 31) は、文法学習の後にコミュニケーション活動をするという点から、Yalden(1983)の Communicative Syllabus Type 1: Structural -Functional(Yalden 109-118)に近いと考えられる。

また 2.1 では、学習者の習熟度の観点から言語形式の基礎がある学生には、ドリル練習などに時間を費やさない strong version of Communicative Language Teaching が実施可能であることを述べた。Dubin and Olshtain(1988)は、その点に関連して、言語形式と言語機能のどちらの要素もシラバスに取り入れる留意点として、「言語機能使用に焦点をあてたコミュニケーション中心の授業をする際、授業で扱いきれない文法や特定のスキルはワークブックを使用して自主学习をさせたり、また、学習の初期段階は言語形式中心の授業をし、文法能力の向上にしたがって言語機能中心のコミュニケーション活動を導入する (Communicative Syllabus Type 3: Variable Focus に匹敵)」などの留意点を述べている(Dubin and Olshtain 117)。よって、言語形式と言語機能を扱う授業へのアプローチは、授業目標や学習者の習熟度に応じて、柔軟に対応する必要があるであろう。

### 3. 2 コミュニケーション活動の選定・作成について

Communicative Language Teaching 実践に際して、strong version of Communicative Language Teaching と weak version of Communicative Language Teaching のどちらの立場をとるかは、シラバス選定や作成に大きな影響を与える。どちらの立場をとるにせよ、活動を通してコミュニケーション能力を育成するという目的に相違はないため、ディスカッションに必要とされるコミュニケーション能力を育成出来るかどうかは、活動の指導のあり方が重要だと考える。よって 3.1 で紹介したすべての Communicative Syllabus で使用可能なコミュニケーション活動の種類を紹介し、コミュニケーション活動を選定・作成する場合の参考となる、コミュニケーションの要素の度合いと学習者に要求される認知・言語運用の度合いの観点から、ディスカッションを最終目標と見据えた活動の指導のあり方に関して述べる。

#### 3. 2. 1 コミュニケーション活動の種類

これまでの考察をふまえると、学生主導の討論型ディスカッションをコミュニケーション活動の最終目標と見据えて、活動を実施することにより、段階的且つスムーズに最終目標のディスカッションへつながると考えられないだろうか。

Dubin and Olshtain(1988)は、コミュニケーション能力育成に重きを置いた授業において、学習者がより効果的な言語使用者になるための様々な言語使用の側面に焦点を当てた10つの言語練習活動を紹介している(Dubin and Olshtain 95-98)。

① Operations/Transformations (操作/変形)

言語使用の正確性を伸ばすために、意味・文法範疇に焦点をあてるドリル練習。

② Warm-ups/Relaxers

学習に楽しさを加えたり、学習者をリラックスさせる活動であり、ゲーム、歌、身体を動かす活動、パズルなどがある。

③ Information-Centered Tasks

情報を集める過程で学習者の言語使用が要求される活動であり、インタビューなどがある。

④ Theater Games

シミュレーション活動であり、ロールプレイやストーリーテリングなどがある。

⑤ Mediations/Interventions

目標言語でインフォメーションギャップを利用した活動であり、意見の交換や、困難な状況にある人の相談にのるなどがある。

⑥ Group Dynamics Activities ⑦ Experiential Tasks

学習者同士で、個人的な感情を共有する活動であり、個人的な話題について話しをしたり、グループで創作活動をする。

⑧ Problem-Solving Tasks

時事・政治などの話題に関して話し合いをしたり、グループ構成員全員が同意するような具体的な解決案を挙げるなどの問題解決学習である。

⑨ Transferring/Reconstituting Information

認知の側面に焦点が置かれた活動で、テキストに書かれている情報に基づいて表やグラフを完成させたり、人々の動機や意図に関して判断を下したりする学習である。

⑩ Skill-getting Strategies

特定の言語スキルを習得することに焦点を当てた活動。

上記の活動の中でも特に、最終目標である学生主導の討論型ディスカッションの要素を含む活動について、その活動がディスカッションに関連するどのような要素を含んでいるか以下で述べておく。

①は、自分の意見や考えを明瞭且つ論理的に表明したり、他者の意見や考えを理解するために必要な言語形式による正確性に関係がある。③は、ディスカッションをする際の下準備としての書面や口頭の形式などによる情報収集に関係する。④は、シュミレーションやロールプレイであり、学習者の役割や状況を設定して言語活動を行う活動である。ディスカッションをする際にも、リーダーや秘書などの役割を与えて実施させることがあるので役割を全うするという面で関係している。また、意見や感情を述べたり、他者の意見の確認をしたり、意見を求めたりといったディスカッションで必要とされる言語表現・言語機能習得を目的としたシュミレーションやロールプレイも可能である。⑤自分の意見や考えを伝え、他者の意見や考えを理解し、意見や考えの交換をすることに関係する。⑥・⑦価値判断型、情報交換型、問題解決型の3つのディスカッションの種類の中でも、物事の価値や、個人の感情などを話し合う価値判断型ディスカッションに当てはまる。⑧グループ構成員で協力してある問題に関する解決策を検討する、問題解決型ディスカッションに当てはまる。⑨ディスカッションの準備段階である情報収集したり、他者の意見や考えをメモしたりすることに関係する。⑩例えば、リーディングであったら情報収集の際のテキストの scanning や skimming などの特定のスキルが考えられる。

これらの活動をする際は、活動を独立したものとして扱わずに、それぞれが、最終目標の学生主導の討論型ディスカッションへの連続体であり、構成要素であることを学生に意識させることが重要であると考えられる。特にコミュニケーション活動の典型であるロールプレイ、シュミレーションを行う際には、近江(1996)がディスカッションで使用される言語機能・言語表現として挙げている「ディスカッションの目的に直接貢献する情報や事実に関する発言である Task Messages (始動的発言、情報請求的発言、情報提供的発言、意見請求的発言、意見提供的発言など)」(近江 291-292)や、「ディスカッションの目的達成を円滑にするための発言 Maintenance Messages (運営法確認的発言、人間関係調節的発言、奨励称賛的発言など)」(近江 291-292)が練習出来るように、これらの要素を意図的に活動に盛り込むことで、学生主導の討論型ディスカッションで生かすことができると考える。

また Dubin and Olshtain(1988)は「授業計画作成者や教材作成者は、これらの言語練習活動に精通し、言語目標に合わせて、活動を選定・組み合わせをすることが大切だ」(Dubin and Olshtain 95-98)と述べているが、これらの活動を選定・組み合わせる際には、言語目標に合わせることは当然大切であるが、学習者の習熟度も考慮に入れることも併せて重要である。1から10の活動をみると、学習者の発話の自由度は活動によって異なりはするが、3以降の活動は特に、学習者の言語運用能力を必要とすることから、学習者のスピーキング力への配慮が不可欠である。この点において、前稿では「英語スピーキング力不足に対応するルールの必要性を論じ、ルールの例として次の対処法」を紹介した。例えば、「英語で3回試みて、相手に言おうとしていることが通じない場合は、日本語を使用してもよい」とする高梨(1992)の日本



語部分的使用の奨励(高梨 75-77)、「言いたいことを日本語でパラフレーズする」、つまり「簡単な日本語に置き換えて考える」ことで、学生が既知の自分の英語の語彙で表現しやすくなると述べる小林(2001)の対処法(小林 95-96)である。また高橋、小林の方法に加え、事前に自分の意見を考える時間を与え、辞書などを使いメモを取った後で、発表させるといった対処法についても述べた。このように、学習者の習熟度に合わせてルールを設定し、活動の難易度を調節して、学習者にとって適切な活動を実施することは、言語学習目標の達成につながるばかりでなく、学習者に英語で活動したという自己有能感を与え、さらなる英語学習への意欲につながると考えられる。

### 3. 2. 2 コミュニケーション要素の度合い

上記の、コミュニケーションの種類に加えて、Dubin and Olshtain(1988)は、コミュニケーションの要素の度合いを、7つの言語活動を尺度に当てはめて示した(Dubin and Olshtain 98-99)。ここでいうコミュニケーションの要素の度合いとは、情報(information)がどのように処理されるかということである。ディスカッションは、他者と作り上げる論理的な討論活動であるので、討論活動を成立させるためには、自分の意見や考えを述べるばかりでなく、様々な情報の処理能力・技術が必要であり、それらを総合的に駆使することが要求される。よって、学生主導の討論型ディスカッションを最終目標と見据えたコミュニケーション活動を実施する際には、ディスカッションで必要とされる情報の処理の種類と、その程度を把握することは有益だと考える。以下の Dubin and Olshtain(1988)によるコミュニケーションの要素の度合い(Dubin and Olshtain 98-99)は、①が最も相互作用的でコミュニケーション活動であり、⑦に近づくにつれてその度合いが減少するものである。

① New Information is negotiated 「情報の表現、情報へ対する反応、情報の解釈であり、目標言語を使用したグループの相互作用的な活動など。」②New Information is expressed 「英作文、口頭報告、留守番電話にメッセージを入れるなど。」③New information is used or applied 「所定の書式への記入、アンケートに答える、友人から必要な情報を集めるなど。」④New information is transferred「表を埋める、グラフを完成させる、地図に記しをつけるなど。」⑤New information is received, but there is no verbal reaction「絵を描いたり、地図の道をたどったり、指示通りに創作するなど。」⑥No information is processed; focus is on form「拡張・変形・置換などの機械的文法ドリル、暗記した対話練習、発音のための音読など。」⑦New information is received(exposure only)「歌・話を聞く、テレビ番組を見る、反応を必要とされないリスニング活動。」

この尺度は、教師が、活動を選定・組み合わせる際に有効である。コミュニケーション能力育成を授業目標とする際、ディスカッションなどの活動が当てはまる、①の New Information is negotiated が最終的目標となるであろう。①の New Information is negotiated は、②から⑦の項目すべてが総合的に作用して完成されると考える。学生主導の討論型ディスカッションで必要とされるスキルと対応させると、例えば、②自分の意見や考えを明確に述べる、③ディスカッションに必要な情報収集をする、もしくは、ディスカッションにおいて他者の発言に反応するために他者の意見・考えをよく聴く、④・⑤他者の意見・考えを聴いてメモをとる、⑥自分の意見や考えを明瞭な発音で、論理的に発表するための正確性を養う、⑦他者の

意見や考えを聴く、などに対応すると考えられる。それぞれの活動をする際には、それぞれの活動が、最終目標である学生主導型の討論型ディスカッションとどのように関連しているのかを念頭において指導すると効果的だと考える。授業目標や、学習者の習熟度に合わせて、コミュニケーションの度合いを考慮に入れて活動を選択・作成することが大切であると考え。しかし、学習者のスピーキング力に合わせて、段階的に授業を進めることも一つの手段であるが、段階的に進まなくても、スピーキング力不足に対応するためのルールを設定することにより、学習目標などに合わせてどの活動でも実施可能になると考えられる。

### 3. 2. 3 学習者に要求される認知・言語運用の度合い

また、Nunan(1989b)は、学習者に要求される認知・言語運用の度合いを考慮して、活動を選ぶ必要性を述べ、学習者への認知・言語運用の要求が段階を踏んで高くなるように、10の活動を、理解中心の活動、から制限産出活動、そして、実際のコミュニケーションへと移行する順序を以下のように示した(Nunan 118-119)。

Processing(Comprehending) 理解

- ① テキストを読む、もしくは聴く。学習者の反応は必要とされない。
- ② テキストを読む、もしくは聴く。学習者は話す必要はないが、身体的反応は必要とされる。例えば、キーワードを聴いたら手を挙げる、など。
- ③ テキストを読む、もしくは聴く。学習者は話す必要もなく、身体的反応も必要とされない。例えば、キーワードを聴いたらチェックマークを付ける、など。
- ④ テキストを読む、もしくは聴く。学習者の言語的反応が求められる。例えば、キーワードを聴いたら、それを繰り返して言ったり、書いたりする。

Productive 産出

- ⑤ 発話、対話の部分を聴き、それを繰り返して言う。
- ⑥ キーワードを聴き、置換・変形ドリルなどをする。
- ⑦ 発話を聴き、適切な反応をする。

Interactive 相互作用

- ⑧ シュミレーション
- ⑨ ディスカッション
- ⑩ 問題解決学習

ディスカッションは、上記の Nunan(1989b)の10の活動(Nunan 118-119)の中で、9番目に位置し、学習者への認知・言語運用の要求が高い活動だとされる。学習者への認知・言語運用の要求が高い分、学習者の習熟度も要求される訳であるが、3.2.2 において述べたコミュニケーションの要素の度合いや、学習者に要求される認知・言語運用の度合いに応じて段階的に授業をするのも一つの手段であるが、スピーキング力不足に対応するルールを設定することにより、習熟度が低い場合でも、様々なコミュニケーション活動を授業に取り入れることが可能となるであろう。学習者の習熟度に制限されず、教授法や教材

などを工夫して、ディスカッションを最終目標と見据えた様々なコミュニケーション活動を授業に取り入れることにより、学生の英語学習への士気も向上すると考えられる。また、前稿でも述べたが、活動を選定・作成する場合、Brown (1987) が述べるように、EFLにおける言語習得の成功を左右する個人に内在する感情要素である、self-esteem(自信につながる自己評価)、inhibition(自我を守るための自己抑制)、risk-taking(どれだけ間違いをすることを許容できるか)、anxiety(言語学習の際に抱く不安)なども十分に考慮に入れる必要がある(Brown 100-106)。よって 3.1 において紹介した、三浦 (1992) の programmed discussion(三浦 31) は、ディスカッションに必要な「言語材料・skill・activity・文化的素材」が綿密、且つ意図的に授業に組み込まれ、ディスカッションを各ユニットの最終目標とし、段階的な指導をするという点において、学習者に言語使用による過度の精神的負担を与えることなく、安心して活動に取り組めるよう計画されているため、特にスピーキング力に不安がある学生や授業の初期段階において効果的であると考えられる。

3.2.1 や 3.2.2 にも通ずることではあるが、⑨のディスカッションはその他の項目が総合的に作用し合い成り立つものと考えられる。たとえば、①から④の Processing(Comprehending) 理解に関しては、ディスカッションのための情報収集をしたり、他者の意見や考えを聴いたり、他者の意見や考えを聴き理解した上で、自分の意見や考えを形成することが考えられる。また⑤から⑦の Productive 産出に関しては、自分の意見や考えを明瞭に発音し文法的に正しく述べ、自分の意見や考えを即座に発表するということが考えられる。よって、それぞれの項目の活動をする際には、学生が学生主導の討論型のディスカッションのどの側面に関連しているかを把握しながら学習すると、最終目標であるディスカッションをする際に効果的であることは明らかである。

このようにコミュニケーション活動の選定・作成に関して、教師はコミュニケーション活動の種類・指導方法に精通し、授業目標や学習者の習熟度と照らし合わせながら、それぞれの活動のコミュニケーションの要素の度合いや、学習者への認知・言語運用の要求の程度を見極めることが重要であり、指導の際には、最終目標である学生主導の討論型ディスカッションのどの面と関係しているのかを学生に意識させることが、効果的・実践的にコミュニケーションの要素を授業に取り入れる鍵になると考えられる。

#### 4. まとめ

以上、本稿では前稿「日本の大学英語教育におけるディスカッションの指導法とは[1]-授業における効果的方法を考える-」の中で、ディスカッションの際に考えられる3つの問題点の一つとして挙げられた、②スピーキング力不足に関する考察を更に深めるために、ディスカッション類似の活動を導入し、どのようにコミュニケーションの要素を授業に取り入れ、学生のスピーキング力向上を図ることができるか、その方法を検討した。その方法としてディスカッションの基本概念だと考えられる Communicative Language Teaching と、Communicative Language Teaching に伴って開発されたコミュニカティブ教授法に関して論じた後、Communicative Language Teaching の導入の仕方に関して、シラバスデザインと、コミュニケーション活動の選定・作成の観点から論じた。

特に既存のシラバスを利用するという点においては、構造シラバスなどの既存のシラバスに、折衷的に Communicative Language Teaching の要素を比較的手軽に取り入れることができるため、授業計画を言語機能中心にすべて変更する必要がある strong version of Communicative Language Teaching よりも、weak

version of Communicative Language Teachingの方が比較的手軽に実践可能ではないかと述べた。また学習者の習熟度の点においては、言語形式のドリル練習などに時間を費やさず、文法を含む言語能力が実際の言語活動を通して習得されるという点から、strong version of Communicative Language Teachingは、言語形式の知識の基礎がある学習者には使用可能であることも併せて検討した。

またコミュニケーション活動の選定・作成に関して、教師は、コミュニケーション活動の種類・指導方法に精通し、それぞれの活動のコミュニケーションの要素の度合いや、学習者への認知・言語運用の要求の程度見極めることが重要であり、授業目標や学習者の習熟度(スピーキング力不足)などの必要に応じて、open-endedなコミュニケーション活動にルールを設定することの有効性を明らかにした。そしてルール設定をすることによって、コミュニケーションの要素の度合いや、学習者への認知・言語使用の要求の度合いに制限されることなく、スピーキング力に不安がある場合でも、様々なコミュニケーション活動を取り入れることができることを論じた。そして、コミュニケーション活動の際には、その活動が最終目標である学生主導の討論型ディスカッションのどの要素と関係しているかを学生に意識させることによって、学生主導の討論型ディスカッションへ効果的につながるのである。

Communicative Language Teachingは、Communicative Competence習得達成のための教育であり、その実現のためにコミュニカティブな教授法やシラバスが発展した。Alptekin(2002)やHyde(1998)は、「国際化による英語を第二言語もしくは外国語として使用する人口の増加に伴う、英語の世界における立場の変化から、native speakers of Englishを標準モデルとして考案された文法能力、社会言語的能力、方略的能力、談話的能力から成るCommunicative Competenceを見直し、世界中の様々な、文化を異にする人々が、効果的な異文化間コミュニケーションを実践できるように、異文化コミュニケーションの要素をcommunicative competenceの一構成要素として加える必要がある」と論じている(Alptekin 57-63)(Hyde 7-11)。よって、日本の大学英語教育においてディスカッションを導入する際には、ESLの教授法をそのまま使用するのではなく、国際人として日本の大学生に必要なとされる能力や、日本の大学生特有の英語学習における問題点・改善点を見極めて、授業を実践していくことが課題であると考えられる。

## 引用文献

### 1. 和文文献

- 小林ひろみ. 2001. 「4技能の指導：話す」JACET(大学英語教育学会)教育問題研究会編『英語科教育の基礎と実践[改訂版]-新しい時代の英語教員をめざして-』(三修社)。
- 近江誠. 1996. 『英語コミュニケーションの理論と実際-スピーチ学からの提言』(研究社)。
- 高梨芳郎. 1992. 「スピーチ・コミュニケーションの指導方法 討論についての指導」鈴木和夫編『ECOLA 英語科教育実践講座 第6巻 スピーチコミュニケーションの指導』(ニチブン)。
- 三浦孝. 1992. 『英語コミュニケーション授業の実際』(第一学習社)。

### 2. 欧文文献

- Alptekin, C. 2002. "Towards intercultural communicative competence in ELT," *ELT Journal*, 56/1.
- Brown, H. 1987. *Principles of language learning and teaching*. Prentice-Hall, Inc., New Jersey.
- Dubin, F and Olshtain, E. 1988. *Course Design: Developing programs and materials for language learning*.

- Cambridge University Press, New York.
- Finocchiaro, M and Brumfit, C. 1983. *The Functional-Notional Approach: From theory to Practice*. Oxford University Press, New York.
- Hyde, M. 1998. "Intercultural competence in English language education," *Modern English Teacher*, 7/2.
- Johnson, K and Johnson, H. 1999. *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics*. Blackwell Publishers Ltd, Oxford.
- Nunan, D. 1989a. *The Learner-Centered Curriculum: A study in second language teaching*. Cambridge University Press, New York.
- Nunan, D. 1989b. *Designing Tasks for the Communicative Classroom*. Cambridge University Press, New York.
- Yalden, J. 1983. *The Communicative Syllabus: Evolution, Design and Implementation*. Pergamon Press Ltd, Oxford.